

清	明元	宋	唐	東晋	時代
← 帖学派 →	〈態〉	〈意〉	〈法〉	〈韻〉	特性
					中国
← 碑学派 →					
↑ [金石学の隆盛]					
					日本
江戸	鎌倉	平安	飛鳥		時代

図2 行書の変遷

◇はじめに  
先月号まで三回にわたって楷書の特徴や書き方について取り上げましたが、今月と来月は行書にスポットをあててみましょう。中学校書写の中心的書体であることに加え、書表現の多様性の点ではこれに勝る書体はありません。

■「行」の意味と行書の範囲

「行」の甲骨文は道が交差している十字路の形で、人が往来するところであるから「いく・ゆく」の意味となりました。すなわち行書とは「歩く」リズムで書く書体です。書体名として

【第五回】「漢字（五体）の基本と書き方」  
— 行書① 古典の種類と特色 —



のルーツは、魏の鍾繇が得意とした「行押書（行押書ともいう）」（初出は羊欣の「古来能書人名」）に求められます。行書は隷書をやや速く簡略に書くうちに、草書より少し遅れて生まれたもので、後に出現した楷書の構築性と草書の流動性を兼ねています。楷書よりも速く書け、草書より読みやすいことから、今日に到るまで実用書として広く使われてきました。したがって、くずし方によって楷書に近いものから草書に近いものまであります。

楷書の構築性と草書の流動性を兼ねています。楷書よりも速く書け、草書より読みやすいことから、今日に到るまで実用書として広く使われてきました。したがって、くずし方によって楷書に近いものから草書に近いものまであります。

草書	行書 (時代順ではない)		楷書

図1 行書のいろいろ

■初期の行書

初期の行書とされるものに、後漢時代の「永寿二年甕」（一五六、台東区立書道博物館蔵、左写真）があります。書体としての完成は東晋時代の王羲之・献之父子の出現を待たねばなりません。



大谷探検隊が楼蘭の遺跡から発掘した「李柏尺牘」（左写真）は羲之二〇歳頃（東晋三二八〜三〇）にあたり、この時期の行書としては貴重な肉筆資料です。素材で堅苦しさはなく、二折法（トン・スー）で書かれています。



常葉大学教授  
本誌編集委員  
平形 精逸

■行書の変遷

羲之の書は、図2のように唐時代に継承され、中ごろには顔真卿らによって新風が打ち立てられました。

北宋時代には「宋の四大家」によって人間性の自覚に基づいた作風が展開しますが、復古主義的な色彩を強めた元・明時代を経て、明末時代には王鐸や傅山らによって連綿を多用した長条幅の行草書が流行しました。

清朝前期は、羲之らの法帖を中心に学ぶ帖学派が主流を占めますが、中ごろからは北魏の楷書や篆・隸書に対する関心も高まり、碑学派による蔵鋒の行書も現われました。

以上のような各時代の特色を、明の董其昌は「晋人の書は韻を取り、唐人の書は法を取り、宋人の書は意を取る」と述べています。さらに後の人は「元明は態を尊ぶ」とつけ足しています。図2で変遷を追いながら確かめてみましょう。

わが国では、平安時代前期の中国風の書をふまえた「三筆」と、中期の国風化された「三跡」は対照的な書風を成しています。

■行書古典の重要作品

図3は、6月号の楷書古典と同様、現行の高等学校芸術書道Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの教科書と「書の古典と理論」によって行書古典の掲載回数を上位よりまとめたものです。

筆頭は王羲之の「蘭亭序」で、羲之の手紙類を書き集めてつくられた「集王(集字ともいう)聖教序」や顔真卿の三稿の一つ「争坐位稿」、わが国の書を代表する空海の「風信帖」がこれに並びます。



「趙子昂題秋山行旅圖」 青山杉雨先生 書

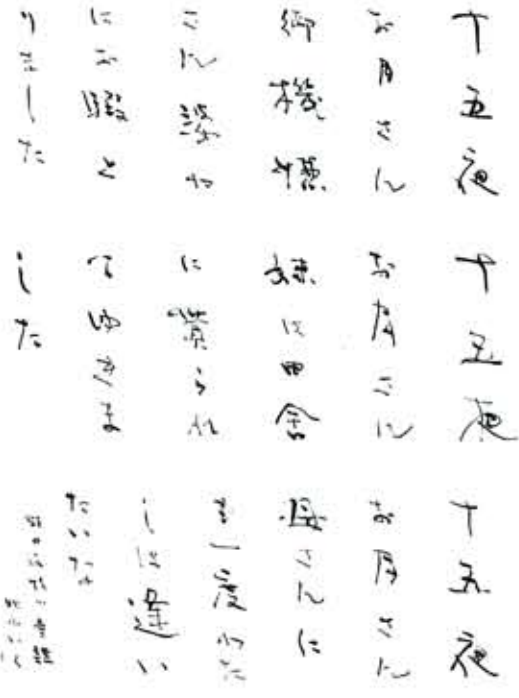
晋 東	唐	宋	平安
<b>最重要古典 (五、四回)</b> 李柏尺牘 王羲之使回履屐 蘭亭序 蔡邕平至九長	集王聖教序 蘭二儀者顔頤實 争坐位稿 黄州寒食詩卷 破竈燒酒華	喪亂帖 羲之頓首表亂之世 枯樹賦 別本垂法傷損 温泉銘 祭姪稿 劉表帖 青壯勁挺姿姿書帖	風信帖 伊部内親王願文 寶藏小正藏而美藏
<b>重要古典 (三回)</b> 孔侍中帖 九月十七日羲之報 中秋帖 未定	胎藏淨頂人 灌頂記 光定威牒 長夜盡兒為難 屏風土代 山齋蓄韻討澄 白氏詩卷 好氣佛唯以美燒茶	依山集閣見平 松風閣詩卷 李鶴雛詠 三ノ里青梅十二重玉	

図3 教科書などにみる行書古典の掲載回数

この他、一回の古典では「晋祠銘」「苕溪詩卷」など数種に及びます。

■行書の特徴

- ① 楷書・隸書を知っていれば判読でき、速く書けるので、言葉を送達するという文字本来の使命を五書体の中で最も発揮する。
- ② 字形も多様であり、変化の自由度も高いので、書造形における感情表出がしやすい。
- ③ 曲線性が強いので、草書と混合した「行草書」や、平仮名を混合させて可読性を生かした「調和体」に最も多く用いられる。



野口雨情「十五夜お月さん」 成瀬映山先生 書

上段の写真は、青山杉雨先生(文化勲章受章、一九二一〜一九九三)の行書代表作(個人蔵)で、美術評論家・故田近憲三氏が絶賛された書です。二行目下の「流」や四行目上の「断」には骨力を秘めた大字の草書を用いて全体をひきしめています。篆・隸書やかなの影響を感じさせる技術を超越した静けさがあります。

左の写真は、成瀬映山先生(文化功労者、一九二〇〜二〇〇七)の書で、野口雨情の詩を題材とした調和体です。行書に平仮名をこく自然に調和させています。細い線をベースにして、重複する「十五夜」などに変化を与え、独特な風趣を醸し出しています。この作品は日本赤十字看護大学(東京・渋谷区広尾)のロビーに常設されています。



行書は種類も目く、色々なものと調和するので、すらすらと上手く書けるようになります!

カット・橋本綾乃